

好色一代男の文章

中 村 幸 彦

先づ最初問題にすべきは一代男を作った西鶴の意識である。今日の如き意義の文学とか小説とかの意識のなかった当時、どんなものと考えてゐたか。西鶴は一代男をもって、物語的な仮名草子即ち、中古の物語とは違ふけれども、相似た所をもった当時向の新しい物語を提出したとする考へは、余り今の所反対がないやうに思ふ。同時代人も、一代男を俗源氏と称したり、やや後には水滸伝と比較した人もある。(拙稿「俗源氏の論」—山辺道創刊号) 物語・小説の類と考へてゐた証拠である。一段譲つて、面白い文章で、各地の遊里の様子や過去の名妓の逸話を報告した仮名草子と、大まかにするならば、全く異存のない所であらう。文章をのみ問題とする今は、それでもよいのである。

それでは、面白い文章、物語的な文章を、西鶴やその頃の一般は如何に考へてゐたか。一言で答へれば、美文であることであつたらう。日常会話や日記書簡などの実用文とは區別してゐた。文学の文章は美文(雅文)たるべしと明確に云ふのは、蔵園以後の漢学者や賀茂真淵以後の国学者達であるが、しかし、第一義的な文学や、文章らしい文章は美文で書くとの考へは、近世を通じて全体に渡つて支配的なことは、実際の例につけば明である。教訓的な仮名草子の実用的文章の中に、突然ひどく気どつた文章に出合つたり、慰み本の俗文学の洒落本滑稽本でも、首尾や所々に、気のきいた叙事叙景の文章を持つてゐる。万の文反古は、どこか往来物に似せた書簡体小説で、一代男と違つて西鶴の晩年の平淡になつた文

章で、且つ書簡体だけに、文章のつやを消すようつとめてゐるが、所々に美文の認められるのは、全くの書簡でなく、當時ながら小説であつたからである。後の三宅嘯山（俳諧古選）や横井也有（管見草）等が、西鶴の文章を称讃したのも、彼等の教養から見て、やはり一種の美文としてであつたであらう。

しからば、云ふ所の美文の内容はどうか。これも一言の答へは、古典的な伝統的な文章とならうか。即ち中古の物語の文章、中世から近世へかけての擬王朝文、漢文又は漢文読み下し式の文章が先づそれに属する。近世も後になると俳文、狂文なども、美文と意識したやうである。がそれらも、古典的伝統的性質を持つてゐたことに變りはない。例の伴蒿蹊の国文世々の跡などでは、雅文（美文）と俗文とを、かなりきびしく區別するが、文の雅俗の區別は時代により人により違つて、明治に入つては、文語文即雅文、口語文即俗文などの例もあり、国学者の蒿蹊とは同じ頃でも、滝沢馬琴（雅俗要文）など、かなり雅文を広く認めてゐて、これが常識であつたらうか。

も少し古典的伝統的文章の性質に立入つて見る。これを用例でなく明確な意識で求めると勿論、西鶴自身には、それを示す資料はない。それで彼に最も近い頃では、森川許六、各務支考など芭蕉門の俳文家達に、それを求めなければならぬ。彼等の見解を必要な範圍だけで、整理して述べて見る。

詩歌連俳の四つにつれて、それ／＼相應の文章がある。たゞし連歌師達は、和歌流の文章にあまんにて、独特な文章を創出し得なかつた。俳諧の文章は芭蕉の創出にかゝると云ふ。詩の文章とは、風賦雅頌の体をそなへた文章、即ち文選所収のものゝの如きを指すのは、彼等が、俳文集を、本朝文選とか本朝文鑑とか称したことからも明かである。大ざつぱに云へば漢詩風の散文詩である。和歌連歌の文章は従つて、和歌的散文詩と解される。支考は、殊に文章の調子を問題にして、我が国の文章でも、軍書や物語は、独自の文法句格は持つてゐるが、句読の長短にかかはらず、事実を述べるを事とする。彼土の史記漢書に比すべきもので、自分の指す文章とは若干違ふと云ふ。許六は、「源氏狭衣のたぐひ、男女の中をつくし、実は哥よますべき道びきなるべし。共に歌連哥の文法にして」（本朝文選）と、和歌的散文詩と解したものを

源氏狭衣の物語的文章だと簡単に解してゐる。支考の方も、よく検討すれば、「連歌には文章の筆格をたてずをのづから和歌の家にせいせられて源氏狭衣のぬめりをつたふ」とか「狭衣は哥にあそべりとぞ」とかの言葉に出合つて、この点では、実は許六と一致してゐるのである。たゞ支考は、物語の流れと彼が認めた平家物語や徒然草等の中には、彼が文章（美文）の第一条件とする詩的要素を欠いで、実用的な要素のあることを、神経質に云つたのであつた。彼が、平家物語でも、「ひとへにもものゝふの草紙にはあらせじと」、巻頭に祇園精舎の鐘の声云々の文章を附してゐるとか、徒然草の「万にいみしくとも色このまざらんをのこ」云々の一文を、好色賦と題して提出して文選所収の宋玉の同名の文とは「其趣ハ異ナレトモ其意ハ同キナリ」とか註記したことからも彼の見解はうかゞへる。

さて俳諧の文章については、一に、支考が文章に起結あり、二句の長短ありとしてゐるのは詩歌連の文章同様、これも散文詩としたのである。本朝文選の序で、李由はこの書所収の文は、「和国の文章にして、其体をのづから、漢文になへり」と、彼土の文選に似てゐる点を指した。二に、李由は俳文を「双紙物語のやまと詞」の類と、區別しようとしたが、支考は、「仮名にして真名にあらず、真名にして仮名にあらず」「和漢の文法に姿情のふたつ」をとり「和漢通用」の文章、「漢文の式を守りて別に倭文の一體を立てたる」など述べて、一種の和漢混淆の文章と考へてゐたことがわかる。三に、文章の虚実を正して、俳諧の筆格を立てたものとある。ここでは俳文の文学性的内容に自然關係してくるので、俳文を論ずるのでない今の場合には必要でないが、支考の虚実論は、姿情論であり、「民間の俗語を以て喜怒哀楽の風情を花鳥風月のすがたにうつし花月の風姿を喜哀の風情にのべて下賦に風月の文道をしらしむ」で、俗談平話を正すべく、文章用語の雅俗の一事についてゆく。支考が云ふ、

我家の点式には、雅言のぬめりには俳諧の躰なしとも、俗語のいやみには俳諧にあらずとも、その両様を書わけよと、新式に故翁の傍訓なり。爰に雅言といひ俗語といひ、どちらも俳諧の公用なるに、ぬめりと、いやみとをそれが病ひとは、これらに俳諧の明白を察すべし（俳諧十論）

と。雅言をふくむ雅文、俗語からなる俗文を考へると、俗文のいやみ即ちあかぬけせぬ所を浄化し、雅文のぬめり即ち氣どりを近世化（卑俗化）して、混ずることも支考に於ては俳文の問題となつたらしい。

以上俳文家の考へから美文の要素を引出すと、散文詩的なもの、漢詩的文章、和歌的文章、和漢混淆文的なもの、俳諧的に浄化された俗文、俳諧的に近世化された雅文がある。後の二つを合せてこれを俳文的要素と考へてもよい。しかし實際にはこれ等の要素は相重つてあることは勿論である。これがそのまゝ、西鶴の意識でなかつたとしても、共通したものは、いくつか持つてゐたと、常識的に考へられるし、近世全体にわたつても、俳諧的なものに狂歌的なものを和歌的文章に上代の文学をも加へれば、大体これで美文要素がつきる様にも思はれる。これを、用語の適否はしばらく問題外にして、各、文脈と仮に称して、一代男の文章を考へる視点に用ひることとする。

更に一代男は初めに述べた如く、当時においては、仮名草子の一つであつたので、以上の美文の要素の中に入らずして、仮名草子に認め得る要素を又、視点に数へねばなるまい。「仮名草子の説話性」（國語国文二十三ノ十二）なる小論で若干述べた所であるが、仮名草子は、その発生成立の事情から、当時一般の教養乏しい人々に理を談じ、事を報じ、心を慰める実用を目的としたものが多く、美文と対蹠的な実用文即ち俗文を用ひてある。俗文の中には、前に支考がしりぞけた記事文や書簡文も入るが、仮名草子に特徴として目立つのは、説法、説話、講義、談話などの、實際の話し方の氣味を持つた口語又は口語的文章である。その文章は当時の俗語や諺を用ひ、文法上でも口語文の用法が出、挿入句の位置や、主語や助詞や敬語などに、殊に様々の特色を示してゐる。文学史家の考証が既にある如く仮名草子の一としての一代男にこれ等の要素のあることは初めから考へておかねばならない。以上は美文の如く常識的にもわかる如く明確な要素に區別出来がたいので、一々は例に即して述べるとして一括、口語文脈としておく。今一つ、これは一代男の調査から出て来たのであるが、談林俳諧の教養として持つてゐた大きな謡曲文章への親炙が、自ら彼の文章にあらわれた要素がある。謡曲文章も混淆体の文章でこれを細別すれば、美文の要素としたものと重複するものがあるが、今は便法として俳文脈の如く、

謡曲文脈としておく。

これからの報告は以上の美文の要素と数へた、漢詩文脈、和歌文脈、和漢混淆文脈、俳諧文脈や、口語文脈、謡曲文脈などを、西鶴はどの様に用い、それが文章上にどの様な特色を示してゐるかの一端を述べることにある。これ等の文脈は、かなりあらい分類ではあるが、若干ふれて来た如く、かかる視点から検討すれば、近世文学の文章全体も考へられさうである。今まで西鶴の文章の特色は、解読の爲の研究が重であつたが、も少し、歴史的に前後が見通せる立場において考察すべきことを希望しての試みである。西鶴が一代男を面白い文章の仮名草子として書いたことは、文章の上から云へば、主に口語文脈である仮名草子の中へ、如何に面白く美文を混じたか、仮名草子の物語を試作したとすれば、美文の中に如何に口語文脈を混じたか、出来上つたものでは表裏であるが、かゝる点に問題の中心があつたらうことは予想出来る。ここで以上の仮に文脈と称した要素について詳述すべき段階であるが、先を急ぐ今は悉く省略して、以下一代男について示す用例（それも紙数の制限の爲一々拘げられないが）によつて察せられたい。

二

さて、何げなく通読すれば、全部一調子に思はれる一代男の文章も、かゝる視点からすれば、部分々に違ひがあり、甚しいのは一章又は章の大半が、どれかの文脈の特色を甚しく示す場合さへある。

既に常識になつてゐるのは俳諧文脈である。俳諧的の意味を、その構成や発想法にまでひろげて用ひる場合もあるが、ここでは勿論文章上のみに限つても、既に詳細な諸家の指摘（陣峻康隆氏「文学の系譜」所収「連想の文学」、野間光辰氏「西鶴新攷」所収「風無常物語」、村田穆氏「俳諧的文章」―国文学第九号―等）のあるにゆづつて、注意すべき二三点を云ふにとゞめる。一に詞付の方法で、俳諧的に関係ある語句をふむく文句をつらねてゆく方法は、彼の俳人として、殊に矢数俳諧の名手としての前半生の修練の結果であると云はれる通りであらう。文章の中に、そのまゝ付合が出る次の括弧の中の如き

さへある。

さて今日よりは、色里の衣裳かさね「これをみる事、命のせんたく」、たゞぬれつゝぞ「山水の、香ひもふかき菊の節句」の暮けしき(七ノ七)

又、文字の上で俳諧的につゞく次の様なものもある。田鶴に浮雲は意識しての用字である。

田鶴の声のみ覚て、浮雲(あふな)き(四ノ七)

二に從來尻取り(田崎治泰氏「西鶴の構文」―西鶴研究六)と云はれるもの、即ち前の文句と、あとの文句の一部分が、枕詞や序詞の次の文へのつゞきの如く二度にはたらくものであるが、謡曲や浄瑠璃にも、かゝる如きは多いけれども、西鶴に於ては、俳諧からの習ひ性となつたもので俳諧文脈の特色と見なすべきであらう。談林俳諧でも一句の仕立に「一村雨のはれやまひなり」(虎溪の橋)「先渡すつり鐘の高百貫目」(同)の如く多いし、貞門になれば一段甚しいのは勿論である。西鶴及びその追隨者達の文章に、以上の如き俳諧文脈のきはだつた事は、当時の人々も気づいてゐる。支考は本朝文鑑の涼の賦で、

その家々の挑灯を出し、をのかさま々の名をしるせる、大和山城は名にこそあふれ、鶴屋亀屋のめてたさも、やを万屋の軒につゞきて、扇屋はよし此折なるへし。風も柳屋の涼しきには、かりのやとりの西行も、宿かしは屋の色にめてけむ(下略)

とあるのを、「家名ノ挑灯ニ浮世草紙ノ筆格ヲ用イタル」と評したのは、その点であらう。三に文句取や、古典古歌のもぢりも亦俳諧文脈で、雅俗、和漢の混淆を試みたものと考へたい。

つれなき思はれ人かな。袖ゆく水のしかも又。同じ泪にもあらず(一ノ四、方丈記)の如きは

操の跡有けり未申ゆかみなりにも千代の古道(三鉄輪、後撰「嵯峨の山みゆき絶えにし芹川の千代の古道跡はありけり」)

と、その姿は共通してゐる。

俳諧文脈にも、既に支考の述べる如く韻文の感があるが、一代男には、更にその甚しい謡曲文脈とも云ふか、語り物などに近い調がある。卷三の七は「あらおもしろの竈神や。おかまの前に松うえてと。」と云った調子で始まるが、進むに従つて、

それ呼返して。男住居の宿に入て。其神姿。取おかして。あらたに。女牀あらはれたり。(謡曲童田) 勝手より。御三寸出せば。次に酔心。かたじけなき御託宣。ありつる告をまたんとて。(童田) 其まゝ抱て寝て。覚るや名残の神楽鏡。(童田)

以下接続助詞の「て」と謡曲の文句を入れた文章がつゞいて、鹿島の事ふれの調子づいた口上につらなる。殆ど「て」による中止形と、名詞止とで文をつらぬくのである。完全な既成の韻文や美文脈になることをさけて口語を混じてゐるが、おびたゞしい謡曲の文句取からしても、謡曲文脈を意識したものである。西鶴の文章に、この「て」の頻出することは、平秩東作（萃野茗談）が徳川時代に既に指摘したが、かかる所では無意識とは思はれない。全体についても、「て」のつゞく文章は、やはり殊更に、のり地になつて話し込む文勢やこの如く調子づいた所に認め得るので、しからざる所では、殊に除いたかと思はれる所もある。

秋の初風はげしく。しめ木に。あらしひ衣うつ。二二二

「はげしく」の下に「て」を入れれば、謡曲らしくなる故につけなかつたのではないか。かかる西鶴の意識を思ふと、普通の文章中の「て」とかゝる文章中の「て」とは、文法上同類にあつかふべきものであつても、文体論の場合には違つて処置しなければならぬのではないかと、今後の文体論の為の語の調査について考へられる。

和歌文脈を取り入れること、卷一の一を初めとして、卷一・二には殊に多い。西鶴は一代男の創作に際して、源氏物語・伊勢物語にならつた、ことは確であるが、一一に直接原典についたか、それ等に組材を求めた謡曲や俗解書を用ひたかは論のある所であるが、文章については、日本に於ける美文の典型としてのそれ等の調を、彼ながらに、取入れようとしたことはいなめない。

御心もとなく。ひかりなを。見せまいらすれば。其火けして。近くへと。仰られける。御あしもと。大事がりて。かく奉るを。いかにして。聞かりなしてはと。御言葉をかへし申せば。うちうなつかせ給ひ。(一ノ一)

かく取出せば、一代男の文章とは思へない程敬語をしきりに用ひなどして物語めいてゐる。初めの数巻は世之助について、殊に地の文にひどく、窮屈に敬語を用ひる。卷二の五、わかさ若松のことを下女と話す一条の如き、伊勢物語の影響でか、会話文まで和歌文脈を採用する。しかるに後になる程世之助への敬語はなく、所々で思ひ出したやうに用ひるのみである。世之助が流浪の生活に入り、名妓達が主人公となつて、世之助又は世之助らしい人物がワキに廻る、作風の中途からの変化もその原因であらうが、卷一・二のかゝる如き文脈を、擬物語の如く全部が全部ふざけて用ひたと思はなければ、美文意識の産物で、和歌文脈を大いに用ひたとしなければならぬ。そしてよく見れば、古典や古典による謡曲などにある文句、「ひそかにすみなして」(一ノ一徒然草十一段)とか、「菖蒲湯を。かゝるよしして」(一ノ三、伊勢一段)とかが見え、卷二の二の冒頭の如きは、どことなく徒然草の文章を模したが如くである。和歌文脈の所々に又、古物語からの文句どりの多いことは、彼の意識の奈辺にあつたかをつげるものであらう。

卷四の一は、主語としての「世之助」と、「世之助」をさす語が一つも出ない一章である。そして世之助にあたる人物の全部の行動が現在形で進められて、最後は「逆もならぬ事を。歎きける」と、愛用の「ける」で結んである。為に文章全体に早い調子を感じられる。又、全体の大半は会話文で埋つてゐる。これは全章が世之助の経験談となつてゐるので、仮名草子の武辺咄のある物に共通する、談話的な文章、勿論口語文脈の一つである。これから会話文をすくなくすると、説話的な記事文となる。卷一の六の後半などその気味があり、文章の調子のかはりの乏しい平板な文章である。そして甚だすくない文章の切目が文語になつてゐる以外は、全部口語である。中には次の如きも見あたる。

鼻紙も人のつかひ

の「の」の如きは「ノーヲ」と読むべきで、口頭の発音のまゝ記載したと見てよい。文法上の文語的活用が混じたとして

も、これも亦口語文脈の一である。

説話談話的な口語文脈よりも一段、徹底したものは、殆ど会話文のみで文をすゝめる所である。卷五の二、

はや八町に着ば。「泊りじや御ざらぬか。広ふてきれいな宿」をとりて。「なんと女郎衆。今爰ではやるは誰じや」と問へば。

「石山の観音様が。時花ます」といふ。「さても人を見立るやつかな」と。其後亭主にあふて。「傾城町の案内頼む」と申せば。

「是は無用になされ。六匁や七匁ではたらぬ」といふ。(下略)

一寸絵入狂言本を読む感がする。原本通りにつけたこの句読からも明かに感得出来るが、自然にその様な筆つきになつたのでなく、西鶴の意識しての結果である。

漢詩文脈は、好色二代男の八の五で、「阿房宮賦」を模した如く、あらはなものは一代男には、まだ気づかないが、和漢混淆文脈と見るべきは、巻一の四の初めのあたりである。男色道の武ばった気分を出すべく、拮屈の文章、用語を混じてゐる。研究家から一代男きつての悪文と評されてゐるのは(村田穆氏前掲論文)、なれない和漢混淆的文脈を、殊にその効果をもたせるべく努めて使用した為でなかつたかと思はれる。

三

各文脈の目立った一二の例を紹介して来たけれども、実際は、それ等が相混じて文をなした部分が普通である。一代男の文章が甚だ多彩であり、屈折の多いと称せられるのも、かゝる異質の文脈が、しげく入りまじつてゐる故である。そして、かゝる文章の底に西鶴本来なる文体の表出もあることは否定出来ないけれども、前掲した一つ一つの文脈を露出させた意識から考へれば、混合して用ひるにも、肯てした西鶴の態度を想像してはいけなからうか。度々引用される西吟の跋文に見える。むかしの文枕と、かいやり捨られし中の、転合書の語は、実にさまざまの重大な解釈を与へられてゐるが、も一つ加へれば、さうした色々の文脈や、その混合を肯て試みたことをも含んでゐる。広く文学と云ふものは面白

い文章であるとの当時の通念と照合すれば、この様な解もあつてもよささうだが。ともかく叙上の文脈の混在が、一代男の文章の特色をなすとの観点から、若干の現象を吟味して見る。たゞし注釈作用に於いて注意されてゐる点については、簡略する。

既に注釈作業に於て注意されてゐるが、普通の文章と比較して、語句の配列が転倒する例が多い。かかる例には又俳諧文脈の混在によつておこつた場合がある。

まだ足もとのあかひ内に。入日も。向の岡を出て行に。(二ノ七)

「入日も」は向ひの岡へ入日がさして、なほ足もとがあかひの意であるが、俳諧的に、あかひ、入日、向の岡と配した如きがそれ。

文脈のかはり目には、助詞を略したり、つけ加へたりする、助詞の変つた様相がしばしば認められる。通釈にあたつては、補つて解さねばならない。謡曲文脈と、散文的な他の文脈とつゞく時などによく見うける。

整切のあさきをいたゞきつれて。(小原木 我からぬらす袂。(謡曲海士)まくり手にして。

袂の下に「を」文字を略したのは、上が小歌や謡曲の文句取でやや韻文的なのを乱さない為であつたらう。次に

浮藻まじりの。桜貝。鱈いとより。馬刀石王余魚。取重て。

の石王余魚の下に「を」文字のないのも、上が売り声か、持ち物を問はれての返答かの気味があつて、故意につけなかつたのであらう。

最も様々の変つた現象のおこるのは、美文系の文語的な諸文脈と、口語文脈との連続転換の場合である。かゝる連続転換は会話文と地の文との間に生ずることは勿論で、この間の西鶴の文章の特色は故藤村作博士の早く指摘された所であつた。既に指摘される曲流文(板坂元氏「西鶴の文体」—文学二一ノ八、田崎氏前掲論文)即ち主語転換の現象も、専らここにおこる。

「まつ明日。『吉野は暇とらせて帰し候。今迄の通に』と。御言葉を下られ。庭の花桜も盛なれば。女中方申入度のよし。触状つかはされ」けるに。(五ノ一)

の如く複雑なものさへある。吉野が旦那にこうしなさいと云ったのが「」の中で、「けるに」と行動したのは旦那である。二度転換して旦那へかへった形である。これも会話と地の文、云ひ改めれば口語文脈と和歌文脈の境におこったもの。諸家の曲流文の用例として掲げられたについて、検討すれば、殆どがこの類であることがわかる。

揚屋町に。さし懸れば。人の命をとる面影。「あれは小太夫さまは野風さま。それは初音様と申。春めきて。空色の御はたつき。」中にはかば糺子に。こほれ梅のちらし。(六ノ五)

これは俳諧文脈の所でかゝげたに比しては、大きな尻取り(田崎氏前掲論文)である。「と申」が会話の中へ入ってもよし、入らぬでもよしの文章ながら、「御はたつき」と敬語を用ひたのは、会話文の中であるやうで、立派に下につどく。かゝる大きな尻取りも、会話と地の文の間、文脈のうつりかはりの際に発生する。これも曲流文と共に諸家の挙例につかれない。(森修氏「西鶴の解釈文法―時代別作品別解釈文法」所収―等)

なほ変った現象をあげれば、

御脇ばらなどを。はゞかりながらなてさすり(一ノ三)

ここの「はゞかりながら」は古典語としては、遠慮しながらと解してはゞかりのない語であるが、この所は会話文の多い所で、口語にして、「失礼ですが」と釈し、古典語と多少意味の違った現代語が同語形である為に、「はゞかりながら」との「と」を入れずに用ひたと考へては如何であらうか。この語を口語とした方が文章は自然である。

むかし宗鑑法師の一夜庵の跡とて。住つゝけたる人の。「滝本流をよくあそはしける程に」。師弟のけいやくさせて。(二ノ二)

従来、この括弧の中は地の文と解されて来たやうであるが、あそはしけると敬語を用ひる所から世之助の叔母の言葉と見る方がよい。すれば「程に」とは、淨瑠璃などによく見えて、「ので」の意で、古典語の「程」に「に」のついたものと

は若干違つてゐる。がここでも語の形が同じ故に、地の文とも会話文とも解せる文章となつてゐるのは、前例に等しい。

銀見習ふためとて。つかはし置けるに。はやしに一ばい三百目の借り手形いかに欲の世中なれば迎。かす人もおとなげなし。

(一ノ三)

傍線の所は、親達の言葉が、そのまま地の文となつてゐる。かゝる例を拾つてゆくと、西鶴の文章は、口語文脈で作られて一勿論頭の中であつてよい—それから美文で飾られて行つたとの感が深くなる。一代男は勿論、仮名草子の流れをうけて、前述した口語文脈の特色を持つことは既に明かであり、その文語文の口語化は歴史の自然でもあつたので、今そのことを云ふのでなく、仮名草子的な或はそれ以上の口語でなつた文章を下において、それを殊更に文語化、この論の言葉で云へば美文化しようとしたのが一代男である。殊更にこの作品で西鶴は国語史の自然に反対して見たのではなからうか。文章法の口語文、文語文はその文法によつて一応定まつてゐるが、ここで用ひた意味の文脈にあつては、文語文法の口語文脈があり、又その反対もあり得るであらう。現に明治の文人の口語文は文語文脈であり、現代人の多くの候文は口語文脈であつたりする例もある。さう思へば一代男の基調の口語文脈はなほ所々に露出する。

(世之介に恋文を代筆した僧についての文) 母親。かの玉章を見れば。隠れもなくかの御出家の。筆とはしれて。「しどもなく」。「さはありながら」と。罪なき事に疑はれて(一ノ二)

の所、主語の転換が行はれて、上から母親で「しどもなく」はたしなめる語。「さはありながら」は僧のことわり、疑はれては受身で主語は僧。この語「さはさりながら」とあつてよいのであるが、この章の大体の和歌文脈の中へ、「さはさりながら」など淨瑠璃めくのをきらつて、拮据な語にかへたのであらう。次いで僧に悪評の立つた所、

人の口とて。あらざらぬ。沙汰し侍る。

も、「ありもせぬ」でよい所を、和歌文脈にひかれて、かかる用語を選んだものと思はれる。一代男の文章は、元祿の文章—芭蕉や契沖や伊藤仁斎の如く和漢雅俗の文章—に共通して、調子が高く、一種の速力を持つてゐるが、一享保期に入ると一

般におだやかな、そのかわりロジカルな文章になる傾向がある―甚だつゝかゝる所の多いのも、かゝる点に原因があると、理解出来るのである。

口語文脈が基調となつてゐるとすれば、この複雑な文章の中から、口語文脈の特色をも少し見出さねばなるまい。既に云はれる挿入句の位置のずれが先づ上げられる。云ふまでもなく、口語では、話の調子によつて、どこに出ても、挿入句たるものが理解出来る。その性質を利用して又、西鶴は様々の技巧をこらしてさへゐる。

① いづれの敵にも。待兼させ。

③ 嵐あらしふく夜は。

④ わざとならぬ。首尾に仕懸て。

② 召連めいれんの者。駕籠かごまでも。

⑤ さし捨すての盃さかずき。(六ノ二)

文の順序は番号の如く、文の構造は線で示す如く解すべきであるが、「嵐あらしふく夜は」の挿入句の位置によつて構成したものである。

又、日常会話では、これまで話して来た内容を、少しく転ずるか、聞手に思考の余地を与へたりする為に、間をおくことが常である。一代男には間をおいて解すべき所が又多い。

禿かぶに私語。手飼てかひの鶯うすを取放させ。(問)庭山ていざんにけはしく。申々と声を立る。(六ノ五)

明日の薪あしたのこには。風かぜを待て。落葉らくえつかき集て。(問)里芋さと芋より。外そとには味噌みそこしもあらず。(四ノ三)

なを秋あきの半なおもひやられ待る。さそ是これなる萩はぎも薄うすも。其時は。(問)花園はなぞのといふ町まちすぢを。(二ノ四)

これらは事件の時間の上にも間があつたり、文章が飛躍したり、思はせぶりであつたりするが、皆間をおいて鑑賞すべき所である。そして、上の例でもわかる如く、間の所に主語の転換がおこることもある。これは会話の時もさうである通り、この文章でもしかりである。

しかし形は同じく間でも、性質の違ったものがある。

二日は越年こしにて。或人鞍馬山あづまやまに誘はれて。一はらといふ。野のを行ば。(三ノ四)

いかに大体が世之介を主人公とするといへども、或人の下に「に」はなければならぬ。これは、その下、「鞍馬山に」の「に」と重なることを慮って、のぞいたものであらう。彼の一代男は於ける美文意識から略したのであって、鑑賞にあっては、一つ間を「或人」の下におかなければならない。

薄原に。かぶり火の影。ほのかに。卒都婆の。数を見しは。いかなる人か。世をさり。惜まるゝ身も有ぬべし。(四ノ二)

では、「世をさり」の下に、「し」の助動詞か「て」の助詞を送れば、上下につゞいて普通の文章となるのであるが、これを欠くために間が出来、このまゝでは曲流文となつてゐる。のみならず間の為に、しんみりとした気分を出すに成功してゐる。文の簡潔を望んだか、俳諧者流の癖が出たか、いづれにせよ、美文意識の生んだ間である。これ等の例も亦、逆に口語文脈を、一代男は基調とすることの若干の証になるであらうか。

四

一代男の文章の特徴的な現象を見て来ての結論は、口語文脈を基調として、大いに美文たらしめようとしたのが、この文章であつたとなつた。西鶴は速筆の人と想像されてゐて、正に然りであらうが、又一つのにをはをも問題とする俳諧師として、敏感な言葉の感覚を持つてゐた人であつたのも間違ひない。その浮世草子の処女作の文章には、色々と神経をつかつたと見てよいと思ふ。従つて美文的な努力が、かなり濃厚にはらはれてゐることは、この作品を、彼ながらに文学的にしようとした意欲を物語るものとも云へる。西鶴はこれから数十年作家としての生活を送り、数々の作品を出したが、一代男以上に複雑な文章がなく、次第にその文章は平明になつて行つたと説明されてゐる。現象からすれば正にさうであり、この論の初めに私もその様な云ひ方をしたが、今にして願れば、後年の西鶴の作品が、かへつて、彼の生地の記事であつて、一代男は特別に当時流に詩味豊かに飾られた文章であると考へるべきでなからうか。もしかゝる考へが許されるとすれば、近時森銚三氏(西鶴と西鶴本等)のとなへられる、一代男のみが西鶴の作品で、他は悉く門人達の作とす

る説は、私も門人作混入説を全面的に否定するものではないが、その文体の批判を根拠とされる点においては、かなり變つてくるのではあるまいか。

事は大きな問題で、後統の西鶴本との具体的な比較の上にたゞねばならぬ。後日を期すとして、今一つ思ひつきを附せば、西鶴の一代男は、時に蕉門の文と並べて、俳文と称されるが、その美文の使用のさま、口語文脈の状態を、支考の言葉をかれば、雅言のぬめりと、俗語のいやみを、故意に用ひたものと云へないであらうか。

この稿は、昭和三十一年十一月三日、京都の国語学会公開講演会での話の大体を、許された紙数に述べたものである。引例も乏しく、論も理をつくし得ない所が多い。詳論の機会を近くに希望して、一応義務として発表することにした。

—天理大学教授—